

第六回 美しい日本語で詩を読む会

朗読詩集 2019.7.7



ぼくのにしるし	有馬 敲	3	お爺さん	下田喜久美	23
札の辻	村田 辰夫	4	マスカット	下田喜久美	25
夕暮れのブランコ	武西 良和	6	ツグミ	波野 仁	26
少年	市原 礼子	8	秋ばれ	さき あけみ	28
夏の掟	北原 千代	9	少年	井上 良子	29
ガッコウへ行こう	司 由衣	10	少年	清水 崇彦	30
いのちの思い	和比古 11	11	ナルキッソス	長岡 紀子	31
大怪物パイヤー	小湖 伸行	13	禁断の愛	すみくらまりこ	32
おとなたち	小湖 舎みなみ	15			
静謐たる決意で明日のために					
	上村多恵子	16			
少年たちよ	浜田 千秋	19			
風に乗って	加納 由将	21			

ぼくのしるし

有馬 敲

ぼくのはなぺちや

だれに にた

だれにもない

ママにた

うさぎが2ひき いえにいる

ぼくのべたあし

だれに にた

だれにもない

パパにた

やもりが2ひき いえにいる

ぼくのでべそは

だれに にた

だれにもない

ぼくのもの

ぼくが ぼくである しるし

『赤いハンカチ』石原裕次郎風に

札の辻

村田 辰夫

昭和の始めごろ

車道に置かれた蒲鉾板状のコンクリート

それが電車の停留場

そこが「札の辻」

そこから八町ばかり西に向かうと大谷のトンネル

その上が行くも帰るも逢坂の関

そこから西は追分 山科 日ノ岡 蹴上

京 栗田口

この京から逆に東へ下り

逢坂山を越え 湖に向かうと

そこが「札の辻」

昔の道路標識の「札」のあった処 分岐点

右の折れると「京町通り」――東海道筋

目蓋をとじると 見るぞとよ 見えるぞとよ

菰を被った荷を運ぶ牛車 旅合羽の人影

ぬかるみの道に敷かれた「車石」――

車軸幅に凹をつけた昔の知恵の結晶石――

この「辻」を左に折れると

三井寺の観音堂の薨が見える

突き当たり手前の道を北に向かうと比叡の峰

このやや幅広い北国街道ほつこくに通じる道が「北国町通り」
なぜかしら 私はこの道が好きだった

秋の夕暮れや冬がま近にせまるころ

ここを通ると襟元や手筋が冷える

その感触が好きだった

補助車輪をとり外して

初めて自転車に乗ったのもこの道だった

夕暮れのブランコ

武西 良和

日が沈み薄暗くなってきた

家に明かりが灯らない

迫ってくる暗闇のなか

小さな公園のブランコに乗った

しばらくは座ったまま

でも静かさに絶えきれず

漕ぎ始め

いよいよ大きく

暗闇の外へ飛び出すほどに

漕ぎ続けていくにつれ蘇ってくる

幼い頃の恐ろしい記憶

ブランコの動きを止め

隣のブランコに乗り換えた

さつきまで乗っていたブランコは

すっかり動かなくなった

暗い寂しさにまみれて

もう誰にも気づかれないほど

暗くなったなか

ブランコを下りて

鉄棒に走った

自分の家もブランコも

握った鉄棒の冷たさも

みんなシルエットになつて薄く

暮れなずむ夕空へ倒れて行きそうだ

少年

市原 礼子

少年はいつか大人になる
さなぎの殻を脱ぐように
青い影を脱ぐ

いつか来るその日のために
少年の小さな背中に
透きとおった翼が隠されている
いつでも飛びたてるように
準備されているその時は
いつ来るのだろう

少年にもわからないその時
わけもなく泣きたくなる
わけもなく怒りにふるえる
なみだを拭いて眺める世界は
いつもと違ってみえる
風がほほをなでてゆく
空から見る世界はこんなにも広い
ぼくはこんなにも小さい
少年に大人になる日がやって来た

夏の掟

北原千代

わたしが庭の 肉桂の樹だったころ
ひとりの少年を知った
蝉のぬけがらをてのひらに
わたしのあしもとを行き来して
かれは遊んだ
たましいを転がすような
好い声で歌った
わたしが庭の 肉桂の樹だったころ
少年はわたしを齧った
ひとしきり
根っこをしゃぶってから

しろい仔犬を
わたしに抱かせた
わたしが庭の 肉桂の樹だったころ
夏はけだるく
赤い痛みをおび
呼びあう声に
骨がふるえた
わたしの愛した少年は
陽の下でほおを照らされながら
温い樹液を吸った
夕暮れは夏の掟をまもり
瞳のふかくなった少年に
さよならを言わせた

ガッコウへ行こう

司 由衣

さあ ぼくよ

ガッコウへ行こう

ひとりぼっちのぼくよ

ある日 ぼくは言ってしまった

「ターゲット探しは止そう」って

ガッコウのかえりみち ぼくは

待ち伏せ三人組からリンチをくらった

「ただいま」と 挨拶をすると

文鳥が「チュン チュン」

「ガッコウなんて行きたくない」と呟いたら

文鳥が「ピピュ ピピュ ピュ ピュ ピュ」

先生に「ぼく文鳥とお話したよ」

と 伝えたら

先生は鼻先で笑った

ガッコウは空き家そっくりだ

埃だらけ 蜘蛛の巣だらけ

先生たちは蜘蛛の糸にからめとられて

「わが校に限っていじめはございません」

ぼくよ さあ

ガッコウへ行こう

ひとりぼっちのぼくよ

いのちの思い

和比古

大学に入学したのに

少年は故意に留年して

危険な峠における

自動車レースで

いのちをはっていた

どこまでも続く峠を

何度も越えようとしていた

同じ林道を走る

仲間らしき車とともに

なぜ

ここを走るのか

彼自身答えを出せずにいた

彼が好きな峠のオブジェも

何も答えない

しかし、キャンパスで

ひとりの人間と出会い

いつしか

こころが

打ち解けるまでになり

卒業研究の道を歩み出した

母はやつと

ホッとしていた

しかし

卒業論文発表会の前夜に

突然襲った心臓麻痺

だが、彼のころは

もう戻ることはない

オブリエのある峠には

大怪獣パイヤー

小湖舎伸行

もうすぐだ

もうすぐ大怪獣パイヤーが帰ってくる

昨日はゲームで遊んでいた僕の邪魔をしたしその前は遊園地に行く約束をやぶったんだ

僕はもう許してあげない

僕のことを「やんちゃだ」

なんてことばかり言って

僕にはマキ先生と一緒に作った

ヒーローの剣がある

これでパイヤーを倒そう

それでお家からケンカがなくなるんだ

ぼっぼー

時計のハトさんが八時と言ってる

もうすぐだ

ガチャ

玄関のドアがあいた

パイヤーが帰ってきた

「ただいまー ケーキ買ってきたぞー」

帰ってきたパイヤーの手には

天使のケーキ屋さんの袋

僕は剣を捨てて　パパにしがみついた

パパとママと一緒に食べるケーキは

ほっぺが落ちそうだ

でも本当にパイヤーはわかってないな

毎日ケーキがあれば僕はおりこうさんなのに

おとなたち

小湖舎　みなみ

「若さというこの世で一番尊いものをまだその価値も知らない幼子に与えてしまうのはとても勿体ないことですよ」

公園で遊ぶ子どもを見て、あるご婦人が言いました

子ども達は楽しそうに夢をばらまきながら

散らばったものには見向きもせずに

大人たちは必死でそれらをかき集めようとしては

指の隙間から零れていくのを留められずに

生花が枯れていくのと同じように

造花も褪(あ)せていくことを知ってから

物に価値を見いだせなくなりました

馴染んでしまったものは

ゆつくりと存在を殺してゆくのだから

変わらないものなどどこにも存在しないのだから

散った花びらもすぐに萎れてしまうのだから

だからあなたは生花を見て美しいと羨むのでしょうか？

静謐たる決意で明日のために

上村多恵子

この世の全部の石を投げ込もう

生きてきた僕の全てを投げ込もう

静謐たる決意で明日のために

搜索しても

何度も名前を読んでも

生きてきた 切れ端すら残せず

何もかもがウンボの

ブルドーザーにガリガリ砕かれ

一緒くたのゴミの中で

ぼろ切れ雑巾のように

ひきちぎられた腕は

へしやいだ足は

はみ出した内臓は

もうウジ虫に喰われはじめて

蟻やハエがたかる

うちひしがれた帰り道

瓦礫の中に春先の雲が舞う

なさけない思いの少年の肩に

声をかけることさえ出来ない

ただ黙って

川に石を投げよう一緒に

丸い波紋が広がるのを眺め

小さな波が大きな円に変わるのを

繰り返し繰り返し投げよう

尖った石

丸い石

赤い石

茶色の石

そしてこの世の全部の石を投げこもう

こんな日のために生まれてきたのではない

君はこんな日のために生まれてきたのではない

こんな日はもう君の人生の中で二度と起こさせない

こんなことを

こんな思いを

こんな日を絶対起こさせないために

今までの僕の全てを投げ込もう

生きてきた

積み重ねの全てを投げ込もう

もう一度 心から笑い合える

そんな明日のために

生きてきた僕の全てを投げ込もう

そんな明日は必ず来る

静謐たる決意で明日を来させてみせる

僕の何を引きかえにしたとしても

港町の日暮れは早い

そんな明日のために

夕焼けが海に沈む

(『消失点まで』)

(ルージュ)

少年たちよ

浜田千秋

少年たちよ

大志など抱くな

挫折の元となるだけだ

何事も信じすぎるな

騙されるし、裏切られる

いま抱えている悩みや怖れていることは

5年経てば大したものでもなくなる

お金に苦勞したことのない者が

「世の中、金じゃない」と言う

必死で努力したことのない者が

「努力より才能だ」と言う

戦争に行かない政治家が

君たちを戦争に送る

自分の感覚を大切にせよ

違和感、嫌悪感、罪悪感を特に大切にせよ

怒り、悲しみ、痛み……、

負の感情は純粹だ

すぐに綺麗事でかき消されたり塗り潰されたりしてしまう

物事は見えてるよりずっと複雑だ

嫌だと感じた事実を大切にせよ

大志など抱かなくていい

小さなことに疑問を抱け

愛、慈しみ、勇気を汚されぬよう

自己の中でしっかり護れ

風に乗って

加納由将

詩を書こうと

言葉を

掴むと

指の間から

すり抜けていく

六月に

稲穂をゆらす

風のように

すり抜けていく

どこにでも

転がっている

言葉なのに

時折

光る時があつて

その一瞬求めて

今日も

幻の

蝶を追いかけて

走っていく

あの少年は

昔の

自分だったのだろうか

言葉は

果てしなき

宇宙まで

届き

体を

抜け出して

風に乗って

どこまでも

飛んでいく

お爺さん

下田喜久美

黙りこくっているのは

考え中という事だね

一郎や・・・

困ったことに会おうと

わたしは自分に言ってきかすのだ

降りかかる火の粉は 自分で払わねば ならん

ある日 向こうから 大きな布が風にあおられてやってき

て

つつまれることだつてある

人が人として活きるのに世界はいつも

微笑んで いたのではない

人々の犠牲や戦いの後で 勝ち取られた

自由や 平安の上に

おまえは幸せの日々を送っているのだということを

考えなくてはいかん

ひらかれた今というものの中ですら

不幸は うす目を開けて狙っているだろう

しかし

外でも 打ち勝ち

内でも 自分自身に 打ち勝ち

その黙りこくった口唇（くちびる）に

楽しいメロディーが 戻ってくるまで

わたしはいつまでも

おまえを

見守りつづけることだろう

つぐみ

波野 仁

昨夜（ゆうべ）を殺した夜明けに急かされ

ライ麦畑で生捕りにしたツグミ

折角（せっかく）生捕りにしたのに

帰ると母さんがすぐに縊（くび）り殺した

「だってあなたのお祝いのツグミパイにするのだから」

母さんはそう言うときすぐさま羽根を筆（むし）りはじめた

ブチブチブチブチ 羽根を筆る

すると隣の少女が泣き出した

「可哀想、可哀想、ツグミが裸にされてるわ」

メソメソメソメソ 泣き出した

ブチブチブチブチ

メソメソメソメソ

僕は思わず耳を塞ぐ

「さあ そのポケットのライ麦を出しなさい」

唐突に母さんが指図した

僕は意味が分からず呆然啞然

「ほらここにあるライ麦をよ」

イキナリ少女がズボンのポケットに手を入れる

ゴソゴソゴソゴソ

僕はとても恥ずかしくて

ドキドキドキドキ

ゴソゴソゴソゴソ

ドキドキドキドキ

僕は思わず目を瞑（つむ）る

「さあ こんなにイッパイ出てきたわ」

少女の白い手に無数の種が掴まれている

「ありがとう これでパイが焼けるわね」

「どういたしましてお母様 私も何かお手伝いしますわ」

二人が仲睦まじくキッチンに

甲高い笑い声が響く

オホホホホホ・・・

ウフフフフ・・・

僕は思わす屈（かが）みこむ

やがてツグミのパイが食卓に

悲しいけれどいい匂い

匂いに負けて僕がナイフを入れると

パイからツグミが飛び出した

そして僕の周りを一回りすると

ライ麦畑に向かって飛び去った

僕はナイフを置くと扉を開く

振り返ると母さんと女の子

空になったつぐみパイに夢中

僕は二人に構わずに家を出る

つぐみの後を追いかけるために・・・

マスカット

下田喜久美

その心ともいうべき

やわらかな うすみどりの球体の中に

身を よこたえるように

心は いやされている

マスカット

しみ透る 冷たい

世の つかれを ぬぐいさり

静けさの美味のひとつきに

招きいれてくださる ひととき

そして

少年の 笑顔のように

純一の すきとおる「時」を くださる

ほの甘い

元初（がんじょ）の みずみずしい出会いのよう

秋ばれ

さき あけみ

コスモスを見に行こうって

母さんが言った

河原のコスモスを抜けて

ぼくは走った

川のそばに下りてみた

小さな魚がいる

向こうには

大きな鳥もいる

帰ろうと

母さんが言った

ぼくは走った

母さんが歩いてくる

コスモスを持って

ドキドキのぼく

母さんが立ち止まった

「ありがとう」に包まれた

少年

井上 良子

ふれ（ら）れないのだ わたしには

それは横顔

それは鎖骨

それはふくろはぎ

それはつちふまず

少年の生息を確かにするために

わたしは詩を書く

詩の中に少年は時折現れる

わたしは感じたい

けしてさわることのできない

ことばの森に住む少年と

高鳴る共振を感じたい

詩の懐のそのなかで

存在をたしかめ合う歓び

詩は鏡だからと

少年の声が今、聴こえた

少年

清水崇彦

いつのころから私は少年で

いつのころ少年は終わったのか

寝ても食べても走っても

少年の存在はすべてが未来形

そんな未来を探るのは

自然や家族や友や学校を通じ

「知る」ことによつてだ

知ること未来に近づく

そして 人は働き

^獲得する^時代に入る

獲得することで生活をつくる

自分ならではの人生をつくる

が やがて^捨てる^時代を迎える

とかく不要な人生の荷物ばかり

捨てても何も困らない

代わりのものなどいらない

ある日 私はふたたび少年に戻る

少年のように未知の世界を^知る^

生きた先には何が見えてくるのか

人は死んでどうなるのか

^知る^この意味は何なのかを

ナルキッソス

長岡 紀子

薄暗い森の中の 小さな泉

そのほとりに咲く黄色い水仙

満月の波が照らし始めると

花は泉に身を寄せる少年となる

無邪気に恥じらう美貌としなやかな肢体

好奇心に満ち 誰からも愛され

慕われても すべてを拒む彼

ただひたすら水面に映る

自分の姿に恋焦れる 美しい迷い花

はるか遠くギリシャ神話は 語る

大人に成り切れず

少年のままのナリ（ル）シストたち

弱さと残虐性を秘めて今の世に問う

愛を受けてもなお引きこもる 傷ついた独り花

役立たずと叫んで 刃を振るう呪い花

少女にこだわって痛めつける 狂った悪の花

息つまる世の貧しさと他人への差別

虚構の世界に迷い込み

居座っているのですか

泉のほとりに咲く

黄色い水仙 一輪

誰にも見つからない

妖精エコーが慕って呼んでいる森の中

禁断の愛

すみくらまりこ

―少年たちも恋をする―

厳格な寮生活のなか

年上のナルチスと

快活なゴルトムントの

恋は静かに育まれる

天性の申し子

奔放なゴルトムント

長い睫毛を伏せる

恥じらいも愛らしく

知性の申し子

冷静なナルチス

物思いに沈む

横顔も美しく

僧院の回廊で

すれ違うとき

目が合い微笑む

それで十分な愛

ナルチスは悩み

苦しみはじめる

秘密の恋は

罪であること

この愛において

何を成就すればいい

膨らんだ思いに

破裂の時がくる

思いを告白する

ナルチスの頬に赤みが差す

「きみは少女を夢み、

ぼくは――」と言ったとき

ゴルトムントを

汚すまいと観念し

ナルチスは青年へと

階段を一段昇った

非売品

二〇一九年七月七日

(C) 日本国際詩人協会